

# 欧米の学校建築にみる多様性

## 日本の学校建築の相対化

鈴木 賢一

欧米の学校建築には、日本にはない多様な計画設計の実例がある。1) 学校規模と南面教室配置、2) 教える教室と学ぶ教室、3) 魅力的な廊下、4) 学習リソースの未来、5) 学校の管理運営、6) 場所から生まれる形、7) 歴史を刻む学校、という7つの観点から、日本と欧米を比較しながら学校建築の計画条件と実際に構築された学習環境の違いを記述した。多様な姿かたちを表わす海外の学校建築を知ることが、建築技術以上に、前提となる考え方の違いに触れることである。ひいては、日本における学校の計画設計の選択肢を増やすことにもつながる

キーワード：教室・廊下・学習センター・学校経営・学校建築

### 1. 日本の学校建築の相対化

日本の学校建築は、社会が大きく変化してきたにもかかわらず、長い間同一の姿かたちを継承し続けてきた。義務教育の普及期から拡大期にかけて、完成度の高い標準設計を準用させることで強固なスタンダードを確立させた結果でもある。そもそも平等性、公平性を基本とする義務教育に関わる公的 school 建築に、汎用性や画一性が求められるのは致し方がない。そこには、日本という国が、どのように子どもたちを教育し、そのためにどのような環境がふさわしいと考えているかが、即物的に現れていたとも言える。

建築技術に関わる項目以外に、教育のあり方や学習環境に対する認識など根底にある考え方が異なるとしたら、それを反映した学校建築は、どのような出現のし方をしているのだろうか。興味深いテーマである。

1978年に改築した緒川小学校（愛知県東浦町）は、従来の集団学習ではなく、個性化・個別化学習を目指したオープンスクールという概念を日本の公教育に本格的に持ち込んだ。従来とは異なる教育の方向性を目指す首長と、建築で学校を変えたいとする設計者の思いが一致し、教室に壁のない

学校、教室以外に共有スペースを十分に確保した学校を実現させた（図-1）。日本においても、考え方次第で前例に縛られない革新的な校舎を実現しうることに驚いたものだ。

今日において、画一的な学校建築を変化させる要因は教育のあり方だけではない。例えば、地球環境問題への対応があげられる。無駄なエネルギーを消費することなく、快適な環境を確保するための技術が積極的に取り入れられることで建築は変わるようになった。また、行政主導で進められてき



図-1 緒川小学校（愛知県1978年）の平面図

た計画設計のプロセスに、地域住民や教員など学校ユーザーが参加するようになり、以前には見ることのなかった小中学校が増え、建築として評価されるようになってきている。

さて、日本の学校建築を研究フィールドとする以上、特定の教育カリキュラムと補助金制度を前提とする学校建築という範囲での研究になる。建築計画研究の多くは比較研究である。計画条件という変数の振れ幅が小さな日本の学校建築を相互に比較したとしても、明確な違いが明らかになりにくい。そこで、計画の前提条件が異なる海外の学校建築はどのように立ち現れるのかを知りたいという思いを強く抱くようになった。機会を得、欧米を中心に海外の小中学校を相当数、実際に訪問することになった。実際に視察をし、ヒアリングを重ねるたびに、子ども達の学びの場、生活の場の環境デザインの多様な選択肢に気づかされることになった。

あらためて振り返ると、学校建築という点で欧米は優れていて日本は遅れている、という根拠のない認識からなぜか抜け切れなかった。しかし、視察を重ね教育には限りなく多様な選択肢があることを理解するようになり、日本の学校建築を相対的に見るができるようになってきた。

現在、日本学校建築は、「画一的である」という状況とは様相を異にしている。子どもが減少する中、ひとつひとつの学校づくりが注意深く行われるようになり、必然的に個別的な計画となってきた。また、小学校と中学校を一体化した小中一貫校も増えつつある。あるいは学校が、単なる教育施設ではなく、地域の交流拠点としてとらえられるようになった。その結果、複合的な機能が付加され、地域利用が積極的に求められることで従来にはない新しいタイプの学校が作られている。

加えてこうした状況を的確に捉えた意欲的な設計者がプロポーザルで選ばれるようになったこともあり、地域固有の設計条件を反映させた個性的な学校が増えつつあるのは間違いない。しかし、長い間培ってきた「学校建築としての常識」が広く行き渡っており、新たな試みに踏み込めない場面にもしばしば遭遇する。日本の学校が様々な試みに取り組も

うとしている今、多様な世界の学校建築は計画条件を理解する上で刺激的でもある。日本で常識と考えていることが、海外では常識ではない。その逆も然り。いくつかの観点からとらえ、学校建築の持つ展開の可能性を見直してみたい。

## 2. 学校規模と南面教室配置

### 2.1 小さな学校

日本では子どもたちの人口減少が急速に進んでいる。0～14歳の年少人口は、1980年代はじめの2,700万人から2015年には1000万代まで減少した。毎年、全国で500校近くの小中学校が廃校になっている。廃校を免れたとしても、必然的にこれまでの学校数、規模を縮小せざるを得ない状況となっている。そこで議論になるのが学校の適正規模と1クラスあたりの定員である。これまで小中学校とも1校当たり12～18クラスが適正規模とされてきたが、2015年1月には、少なくとも1校当たり6クラスを下回ることはないようにと指針が2015年1月に文部科学省より示された。1クラスあたりの定員についても先進国では25名程度としており、長らく40名を定員とする我が国の少人数化への基準変更も時間の問題と考えられる。そのことにより、教室の適正サイズの見直しも必要となる。

アメリカの社会学者が『大きな学校、小さな学校-学校規模の生態学的心理学-』（R. G. バーカー、P. V. ガンプ著、1982年、新曜社）で、大きな学校よりも小さな学校の方が人間同志の交流が盛んで、部活動や行事が活発に行われることを報告した。そもそも人口密度に帰着することかも知れないが、イギリスや北欧の学校は概して小規模である。1学年1クラス、平家建ての小さな学校が一般的である。

しかし、これまで日本では子どもの数が少ないと切磋琢磨の機会を奪われ競争心が育たないという面が強調され、小規模校の良さが一般的に評価されてこなかった傾向がある。にもかかわらず、日本でも規模別の学校数を全国規模で見渡すとは、1学年1クラスが最も多い（図-2、図-3）。これ以上の規模を維持しようとするれば、必然的に学区を広域化せ

ざるを得なくなる。学区の再編は、地域コミュニティのあり方に影響を与える。人口減少の中、学校配置が「まちづくり」の視点で見直されることになるであろう。

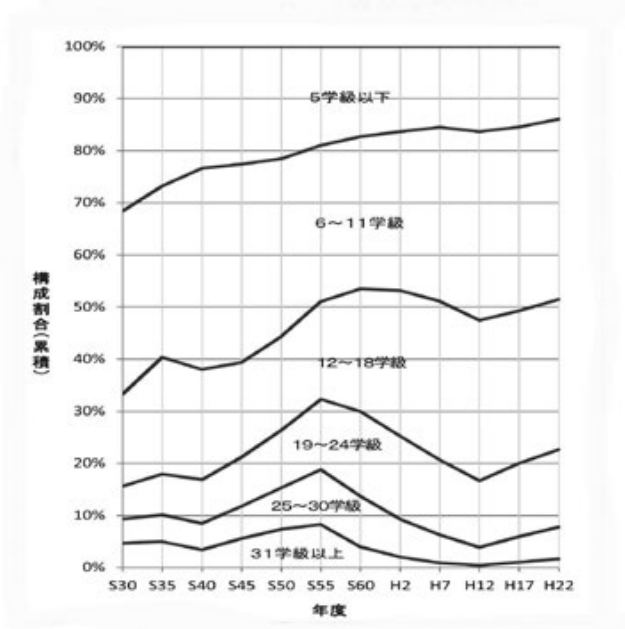


図-2 学級数別小学校数  
(国立政策研究所紀要第 141 集 H. 24 より)

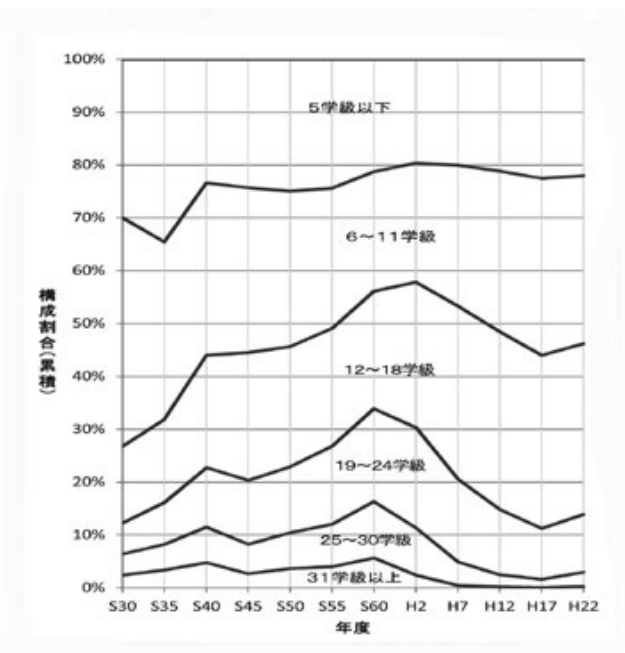


図-3 学級数別小学校数  
(国立政策研究所紀要第 141 集 H. 24 より)

## 2.2 方位と無関係な教室配置

アメリカでは、ネイバーフッド、ファミリー、ハウスなどの名称で呼ばれる一群の教室ユニットで構成される学校平面がみられる。これらの多くは、共通スペースを複数の教室が取り巻くユニットを基礎単位としており、さらに複数のユニットが全校共通のスペースで連結される平面構成をもつ。こうした場合には全ての教室の向きを、例えば日当りのよい南側に向かせることは無理である。方位に対して全く無頓着とも思えるプランニングに、潔さを感じるほどである。全館空調、人工照明で室内環境を安定させることで成り立つプランである。むしろ、外部との関係性を遮断することで、集中できる環境を得ようとしていると言える。方位の制限から解放されたならば、どれほど多様なプランニングが可能になるかは明らかである。図-4 は、アメリカのミネソタ州にあるバレイクロッシング・コミュニティスクール (Valley Crossing Community School、1996 年) で、ネイバーフッドと呼ばれる 3 つのユニットが中央の共通特別教室群を中心に配置されている。

日本では、こうはいかない。教室を南面させるのは常識であって、北側に教室を配置しようものなら、専門家としての資質さえ疑われかねない。北側教室を意図的に計画するためには、南面採光を越える計画理論が必要である。もちろん、

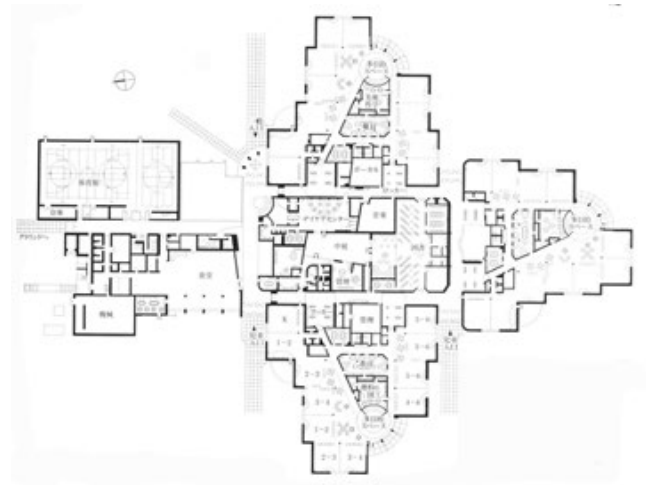


図-4 Valley Crossing Community School (米国) の平面図

ある意図をもって北側に教室を配置し、全く問題なく運営されている事例もいくつもあり、むしろそうした事例の情報共有が重要であると思われる。

### 3. 教える教室と学ぶ教室

#### 3.1 正面のない教室、壁のない教室

1970年代にアメリカでは多くのオープンスクールが建てられた。教室の四方に壁がなく、子どもは一人一人の学習プログラムにしたがって学習場所を選択する。机配置も行列スタイルではなく、グループ作業を中心としたランダムな配置だ。椅子机を使わず、自由な姿勢で床を使って学習する姿も見受けられる。

教師たちは、「子どもたちの前に立つな。子どもたちの後ろに廻って背中を押さない」をスローガンとしており、正面性のある教室を必要としなくなった。写真-1は、アメリカのインディアナ州にあるマウントヘルシー小学校 (Mt. Healthy Elementary School, 1972年) の授業の一場面である。四方を壁に囲われた教室はなく、学年毎に一定の領域が与えられている (図-5)。

その後、行き過ぎた個別化や学習環境で発生する騒音問題への反省から再び壁のある教室への逆戻りがおこる。教室を開放するのか、閉鎖するのか、選択できるようにするのは、日本でも多目的スペースが普及するにつれ議論されるようになった。

そもそも伝統的な矩形の教室に、正面 (前と後ろ) があることの意味を確認すべきである。黒板の前には教壇という仕掛けがあり、教師の視線は高い位置から、椅子に座っている子どもたちに鋭く落とされる。「姿勢を正して前を見なさい」という指導者と、軸線の強い教室空間がその教育観を語っている。イギリスの産業革命とともに、「学級」という概念が発生し、効率的な「一斉授業」というシステムと表裏一体になっているものだ。もちろん人間味あふれる一人の教師と、見守られる子どもたちが共感しあう濃密な人間関係を作り出す空間でもある。



写真-1 Mt. Healthy 小学校 (米国) の授業の様子

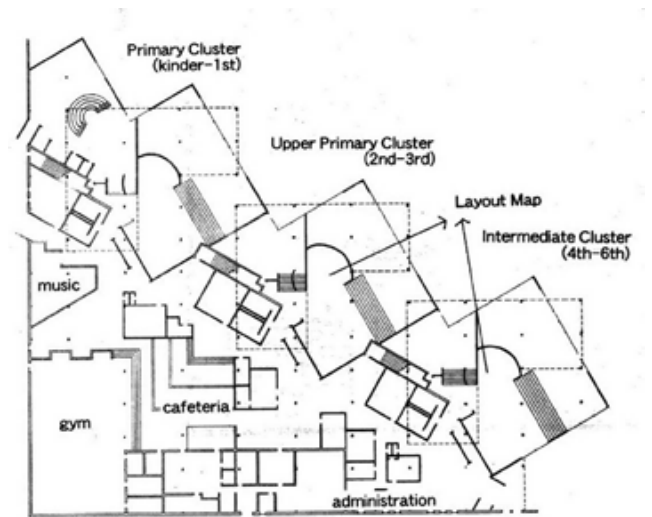


図-5 Mt. Healthy 小学校 (米国) の1階平面図

#### 3.2 多様な形の教室

正面のある四角い教室には、前部から後部に向かう強い軸線がある。もちろんこの軸線は、隠れて見えないが、教師と子どもの関係を象徴する。古今東西、教室はかなり普遍的に矩形である。しかしながらオープンスクールを例に持ち出さなくとも、まれに教室が三角形、六角形、扇型、L字型など四角でない事例を見つけることがある。

ニューヨークにあるヒースコート小学校 (Heathcote elementary school, 1962年) は六角形教室が4つ組合わせたユニットで構成されている (写真-2、図-6)。六角形の教室は、方向性が曖昧でそれだけでリラックスできる雰囲気を持つ。ここではお互いの視線が柔らかく交錯する。哲学者



写真-2 Heathcote 小学校 (米国) の教室



写真-3 員弁西小学校 (三重県いなべ市) の教室

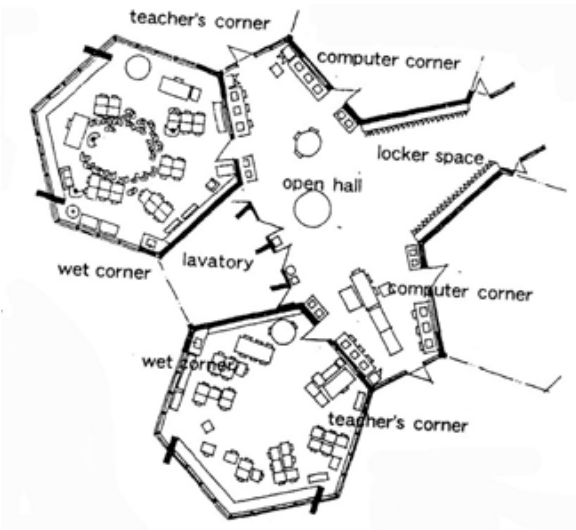


図-6 Heathcote 小学校 (米国) の教室平面図

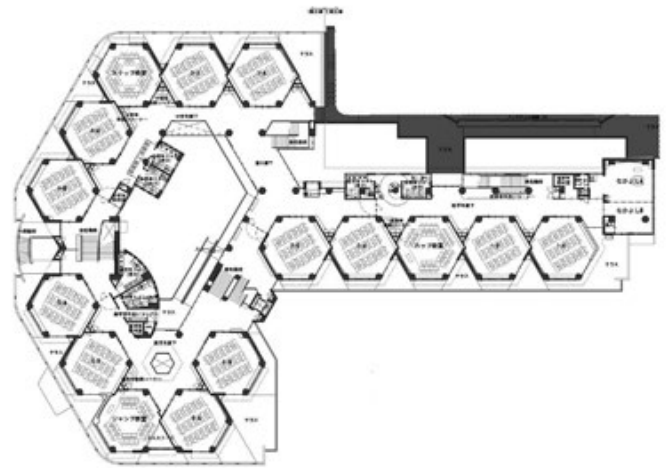


図-7 員弁西小学校 (三重県いなべ市) の平面図

として有名なシュタイナーの思想を受け継いだシュタイナー学校は、子どもたちを包み込む柔らかい空間形態を特徴としている。L字型の教室では、学ぶ場、遊ぶ場の領域が、平面形の特性上自然に確保することができる。教室は毎日そこで過ごす環境であって、形態に付随する雰囲気は、頭脳が「理解」するというより、五感を通じて体感的に伝わる。

日本においても、事例は少ないが矩形でない教室をもつ学校がある。例えば、員弁西小学校 (三重県いなべ市、2010年) は、同一敷地内の建替え計画において、敷地形状と教室配置の検討プロセスから六角形教室を実現させている (写真-3、図-7)。

#### 4. 魅力的な廊下

##### 4.1 廊下は交流の場

学校は、内部での利用者の移動の多い施設であり、教室をつなぐ動線としての廊下はその役割を担っている。通路としての機能に特化する限り、特段の工夫を求められることはない。

その廊下をコミュニケーション空間としてデザインし演出する事例を視察した。デンマークのコペンハーゲン郊外にあるトアストロップ小学校 (Torstrop skole、1986年) である。学校は子どもたちが活動する「小さなまち」で、廊下はまちを行き交う「街路」と見立てられている。

吹き抜けのある中廊下は、上部から自然光が入り込み、学

校の骨格となる魅力的なスペースとなっている。幅員の広い狭いを組み合わせ、子どもたちがすれ違ったり、立ち止まったりする場を巧みに生んでいる。床の素材は外部用歩道ブロックとし、照明も外灯のデザインを持ち込んでいる。2階とつながる開放的な階段や、ロッカーなど、さり気なくコミュニケーションを促す仕掛けが組み込まれている（写真-4）。

この小さなまちのストリートに対して、オランダのアムステルダムにあるモンテッソーリ高校（Montessori College Oost、2000年）の廊下は大都市の駅前メインストリートのような雰囲気である。5階建ての校舎の吹き抜けが印象的である。両サイドの廊下とランダムにつなぐブリッジ、上下移動のためのシースルーエレベーターは、教室を移動する生徒たちの動きを視覚化している。休み時間になると生徒が一斉に校内を移動する様子を一望することができ、飽きることなく、学校が出合いの場であることを実感させる。

#### 4.2 廊下は共有の学習空間

イギリスでは、1960年代から80年頃にかけて、小さな機能空間を連続させた有機的平面構成を作り上げてきた。そこには通路に特化したスペースは見当たらない。ところがその後、学級教室と廊下的な空間とで明確に構成される学校が建設されるようになった。ただしそのスペースは、コリドール（corridor）ではなく、共有スペース（shared space）と呼ばれる。

ハンプシャー州のハッチワレン小学校（Hatch Warren Junior School、1992年）の共有スペースは移動のための空間でありつつも、学習のための重要な空間として位置付けられる。通常の廊下の2倍程度の幅員があり、個別学習用の机と椅子、個人用の収納棚が設置されている。連続して図書スペースにつながっている。コンピュータの端末も置かれ、授業中も教室から出て来た子どもたちが活動をしている光景が見られる（写真-5、図-8）。

学校規模が日本に比べ小さく、平家建てであり教室から直接外部に出ることが可能で廊下は避難通路としての役割が低い。また上下足の履き替えがないこと、ほとんどの学習を

学級教室で行うことから、廊下の移動頻度が低いことなど、廊下を学習スペースとして整備できる条件が整っていると考えられる。



写真-4 Torstrop 小学校（デンマーク）の中廊下



写真-5 Hatch Warren J 小学校（イギリス）の中廊下

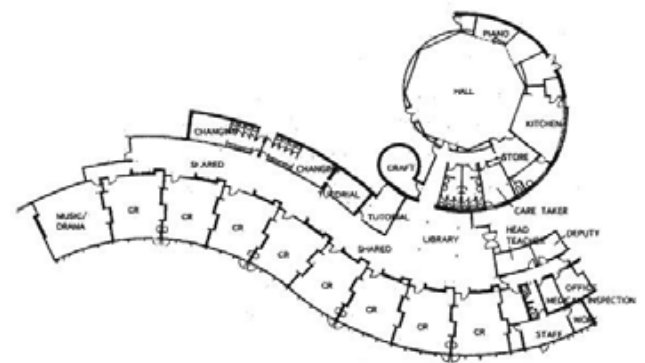


図-8 Hatch Warren J 小学校（イギリス）の平面図

同じような空間は、フィンランドでも見る事ができた。ホスマリ小学校（ヘルシンキ）は、教室に面する廊下にグループ学習用の環境を整備している。個別学習のための多様なスペースのひとつとして廊下が活用されている事例である。さらにつけ加えると、設置されているカーペット、家具などは家庭的なデザインとなっており、賑やかに飾られた壁面掲示と相まって廊下らしからぬ雰囲気である（写真-6）。



写真-6 ホスマリ小学校（フィンランド）の廊下の学習スペース

## 5. 学習リソースの未来

### 5.1 巨大な学習センター

アメリカ、コロンバスの中心部に、フォドレア・コミュニティ小学校（Fodrea Community School、1973年）がある。コンコースと呼ばれる中庭の周辺を、校舎棟、（体育館や特別教室のある）活動棟、食堂棟が取り囲み、L字型の校舎棟の中心部に、2層分吹き抜けの学習センター（Material Resource Center）がある。ここには、書籍、ビデオテープ、CD、コンピュータソフトなどの電子教材が取り揃えられ、熟練した司書がいつでも相談にのってくれる。

開校当時オープンスクールとして個別授業を展開していたが、ある時期からグループを基本とした学習、同学年でのチーム・ティーチングへと移行させてきている。課題解決のための情報源がこの学習センターである。読書のための図書館ではなく、調べ学習のための学習センターとして機能している（写真-7、図-9）。

子どもたちが主体的に課題に取り組むための学習リソースについては、日常的に触れることのできる動線の中心に配置されるのが効果的である。最近の日本でも、特別教室のひとつとして独立性の高いスペースとして整備するのではなく、容易にアクセス可能なオープンスペースとして設置する事例が見られるようになってきた。

### 5.2 図書不要の学校

ストックホルム郊外にあるクンスカップ基礎学校（Kunskaps、2000年）は、吹き抜けのある大空間が校舎の中心的な場所にあり活動の中心となっている。ガラスのカーテンウォールから降り注ぐ自然光のもとでグループ学習が展開される。2階には中規模の教室サイズの部屋がいくつか



写真-7 フォドレア・コミュニティ小学校（米国）の学習センター

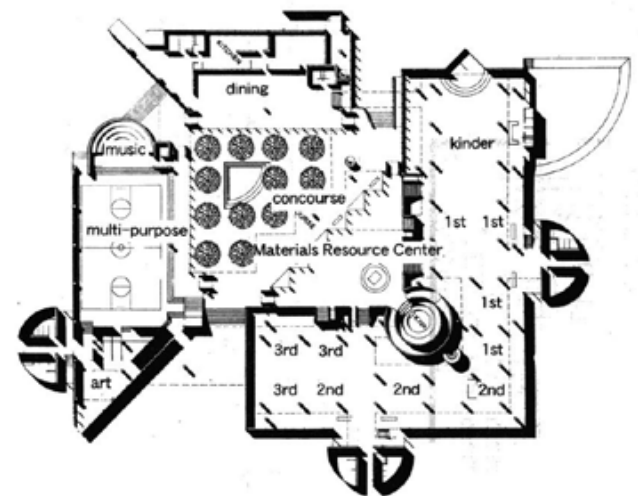


図-9 フォドレア・コミュニティ小学校（米国）の学習センター

## ■ 24 欧米の学校建築にみる多様性

と、わずか数名が入れるだけのガラスで区切られた小さな小部屋が複数用意されている。最大の特徴は、校内の各所にコンピューター端末が利用できるコーナーがあり、必要に応じてネット情報を入手できることだ。「インターネットで世界とつながり、どんな情報でも入手できるので、学校には図書館を設置する必要がない。」と案内していただいた校長先生が明言された（写真-8）。

場所や時間を問わず情報を得られるインターネットの活用で、図書館不要とする決断はなかなかできるものでない。将来、安価で使いやすい端末が普及すれば、スペース主体の学習環境のあり方に大きな変化が起こるかもしれない。

### 6. 学校の管理運営

#### 6.1 民間企業が管理運営する学校

先に紹介したクンスカップ基礎学校は会社組織が経営している。訪問時、この学校を運営する会社は、既にスウェーデンで数10校の学校を経営し、生徒数4,500名、教員数は250名ほどを雇用していた。他の会社も競うように公教育に参加しようとしているそうだ。義務教育レベルの学校に民間の力を導入する手法は、ひとつの流れを作ろうとしている。高度な教育を実現するために、子どもの学習成果を公表し、資金を集める試みが実際に始まっている。

この学校では、明らかに他の公立学校では感じることもない教員の意気込みを感じた。ここでは、教師は与えられたカリキュラムをこなすのではなく教師自身が自分達オリジナルのカリキュラムを作成し実践することができる。教師となって子どもたちの教育に関わってみたいという動機の原点がここでは実現可能となっている。ただし、教育成果の評価は厳しい。通常ならば子ども一人当たりの校舎面積といった指標で学習環境の質を比較することが多いが、ここでは床面積あたりの学習成果という指標が提示されている。

#### 6-2 学校の中の学校

ストックホルム郊外の住宅街に、フューチャラム基礎学校（FUTURUM、1999年、別名 School of Future : 未来の学校）

がある（写真-9、図-10）。全体としては児童数1018名の比較的大きな学校だが、1年から9年生まで学年を混合させた6つのグループ（Working Unit）に分かれていることが特徴



写真-8 クンスカップ基礎学校（スウェーデン）の情報コーナー



写真-9 フューチャラム基礎学校（スウェーデン）の教室

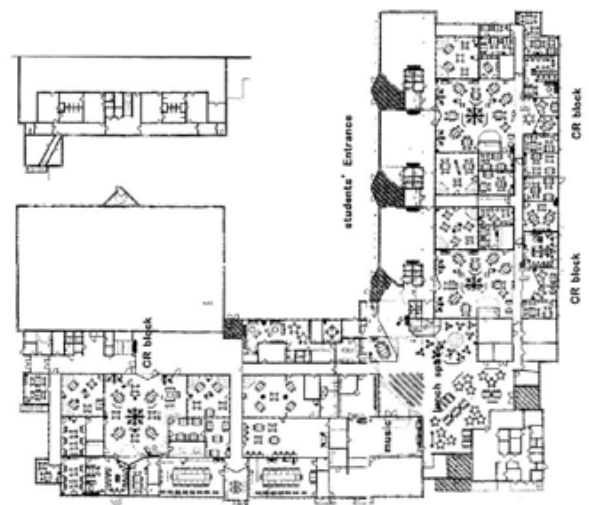


図-10 フューチャラム基礎学校（スウェーデン）の平面図



となっている。一つの学校を複数の縦割りグループで運営する手法は、「学校の中の学校：Schools within a School」という概念として知られている。

小さな運営単位とすることでフットワークの良さを活かし、組織の活性化を目指している。運営の単位となっているワーキング・ユニットの児童数は約160人、教員16人が担当している。各ワーキング・ユニットは、中心部に広めの共通スペースをもち、周辺にいろいろなサイズと形の小部屋が配置されている。

ただし区画された小さなスペースは、ガラスを多用したスクリーンで、空間としては閉ざされているが視覚的に透過性が高い。子ども達は、個人の学習方法、スケジュールなどの記帳された個人ノートを各自持つ。学校のホームページにアクセスすると1日の学習内容とその日の宿題が掲載され、その内容を知ることができる。

## 7. 場所から生まれる形

### 7.1 場所から生まれる形

イギリスのハッチワレン小学校(Hatch Warren Junior School、Basingstoke、1992)は、8クラス352名の小規模校である。この学校建築の特徴は、うねるように配置されたS字型の校舎の形態である。この形態は、敷地の等高線をそのまま校舎配置に反映させたところから来ている。

従来ならばブルドーザーで敷地を水平に整地し、工場から運ばれてきた部材を現地で組み立てる手法がとられてきた。しかし、ここでは土地には手を加えないという決断がなされた。無闇に土地に手を加えるべきでないという考え方は、土地というかけがえのない環境への配慮の現れだ。土地の条件にあった建築をひとつひとつ造り上げてきた本来のやり方に立ち返ったとも考えられる。

校舎内部の共有スペースはゆるやかなカーブを描き、トップライトから落ちる自然光でとても気持ちのいい空間となっている。蛇行した校舎の脇にはホールのある山高帽のような円形の建物が寄り添って、スケール感といい曲線の柔らか

さといい、子どもたちのための優れた建築のあり方を見ることがができる(写真-10)。

### 7-2 風景に馴染む形

イギリス北西部はピーター・ラビットの物語が生まれた土地柄で、ゆるやかな緑の丘陵地である。リス小学校(Liss Junior School、Petersfield、1992)は、そんな田園風景の中に建てられた(写真-11、図-11)。緑の田園風景に馴染ま



写真-10 ハッチワレン小学校（英国）の校舎外観



写真-11 リス小学校（英国）の校舎外観

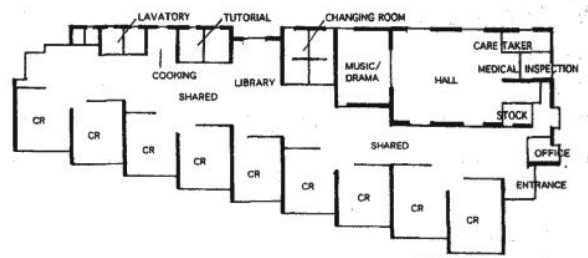


図-11 リス小学校（英国）の校舎平面図

せる屋上緑化が外観上の大きな特徴となっている。校舎周辺には、基礎工事で排出された土を利用して緑の丘を作っている。遠方より眺めた時、緑の丘陵地に建てられた校舎が風景の中から飛び出ることのないよう屋上と両脇を緑で覆ったのだ。

シンボリックな建物とするため「地域のランドマークになるよう」という言い方がされるが、ここではむしろ風景に馴染むための配慮を感じる。

また、緩やかな敷地形状のため、勾配に沿ってエントランスから奥に向かってスロープとなっている。両側に配置された教室は奥に行くほど床レベルが高い。教室もコンコースも白を基調としたインテリアで2層吹き抜け程度の天井高さを持ち、開放的開口部からの自然採光で校舎内はとても明るい。

## 8. 歴史を刻む学校

### 8.1 永く地域に愛される

アメリカのシカゴ近郊ウィネトカの町にある小学校を、80代にとどころという御老人が案内してくれた（写真-12）。その学校は、彼が20代のときに設計したクロウアイランド小学校（Crow Island Elementary School、Illinois、1940年）。若かりし頃の作品を懐かしんで紹介してくれたわけではない。

彼は、学校評議会であるガバナー（governor）の一人として学校の運営などに発言権を持っている。1940年開校の学校の設計者は、以降60年近くもこの学校を見守ってきている。この期間には、補修、改築、増築と、建築維持に関する様々な出来事があったに違いない。設計者として、あるいは役員の一員として学校とこのような関わり方ができるのも、彼が地域住民や学校から絶大なる信頼を受けているからに他ならない。

アメリカの建築雑誌 Architecture Record 誌は、この学校を過去100年間で最も重要な建築作品として選んでいる。また、1990年にアメリカ建築家協会（AIA: American Institute

of Architects）は、国の歴史的建造物（National Historic Landmark）として認定している。

Lの字型の教室、それによって生まれるワークスペースと外部の庭が当時の学校建築の在り方をリードした。それらが建築的に高く評価された。この学校は、将来にわたって地域に永く愛され歴史を刻み続けるであろう。

ここには設計者と建物の理想的な関係がみてとれる。学校建築が、持続的に設計者と子どもをつなげている例である。

### 8.2 時代に即した改修

デンマークのコペンハーゲン郊外に建つショルネガルド小学校（Tjonegardsskolen、Gentofte、1924年）は、新しい教育に意欲的に取り組む革新的な学校である（写真-13）。

しかし建築はどうかと言えば、1920年に建てられた歴史的な様式建築である。学校建築の典型的なスタイルの一つで



写真-12 クロウアイランド小学校（米国）の校舎外観



写真-13 ショルネガルド小学校（デンマーク）の校舎外観

あるクワドラングル (quadrangle) という校舎の中央に四角い中庭を抱えた、いわゆるロの字型の建物である。その中庭をガラス天井で大胆に覆うことで、巨大な多目的スペースを生み出している。ホール中央からぐるりと周りを見渡すと、昔は外部に面したであろうバルコニーのアーチ状の意匠がリズムカルに並ぶ。校全体がこのスペースのおかげで強い一体感を得ている。

意欲的な女性の校長先生は、次の校舎改造の青写真を説明してくれた。教室同士を区切る固い壁を取り払い、しかも廊下を取り込んだ形で小スペースを連続させようとするものである。明らかに斬新な学習スペースのアイデアである。「歴史を積み重ねたまちに対して外観の表情を維持し、内部は求められる機能の変化に即して手を加える」という手法をこれから学ばなければならないと強く感じた。

### 8-3 海軍造船所を学校に

フィンランドの首都ヘルシンキの旧市街地のある学校は、酒造会社の厚生施設をそのまま利用したものだ。かつては、工場で働く人々が使った屋内プールやスポーツジムの充実した学校だった。

港近くにあるカタヤノッカ小学校 (Katajanokka, Helsinki, 1986) は、かつての海軍造船所を改造 (conversion) した公立小学校だ。この建物がそうであったように、学校周辺の町並みを眺めると、一目で歴史的地区であることが分かる。外観は当時のままに煉瓦造を継承しており、容易に学校とわからない。玄関をくぐると、外壁とは一変して真っ白な空間である。清潔感溢れる2層吹抜の巨大なアトリウムには、緑の植物と素敵なデザインの照明器具があり、さながら家具のショールームのようだ。当時のまま保存されている煉瓦造の煙突だけが、唯一造船所の面影を残す。

これらの事例は、一旦構築した建物を無闇に破壊することをしないで、新たに手を加え別の器として使うことにより、



写真-14 カタヤノッカ小学校 (フィンランド) の校舎外観

長く使うことができることを示している。転用再生の現場では思いもつかぬ大胆な転換の交換が行われる。ここで学ぶのもたちにの目にはどのように映っているのか知りたいところだ。

### おわりに

ここまで、日本の学校建築と比較しながら海外の学校建築の多様な姿を7つの視点から記述してみた。教育の方法にしたがって学校建築が生成するのか、建築という物理的環境が前提になって教育が展開されるのかは定かではない。ただし、両者が表裏一体の関係であることは間違いない。

まだまだ、いろいろな視点から切り取ることができる。障害児教育、エリート教育、小中一貫教育、情報化と学習、子どものためのインテリアデザイン、家具デザイン、特別教室、給食と清掃、外部空間のデザイン、コミュニティとの関係、通学の仕方、セキュリティなど多岐にわたる。

学校は、まずは子どもの成長発達を促す環境であって、大人のためではない。しかしながら、そこにはその国の大人たちが子どもたちにどんな環境を提供しようとしているか色濃く反映される。学校建築の海外研究は、子どもの教育に関わる比較文化人類学の興味深い一分野でもある。

